

平成20年度遠洋水産研究所運営会議 報告書

会議責任者	遠洋水産研究所長
-------	----------

- 1 開催日時及び場所 日時 平成21年3月5日 13:15～17:30
場所 遠洋水産研究所 会議室「富士」

2 運営会議出席者

外部運営委員 4名

畑中 寛 (財)日本鯨類研究所 顧問
末永 芳美 東京海洋大学・先端科学技術研究センター 教授
水野 恵介 (独)海洋研究開発機構・地球環境観測研究センター
気候変動観測研究プログラムディレクター
木村 力 静岡新聞社 浜松総局 編集部長兼論説委員

遠洋水産研究所出席者 7名

魚住 雄二 所長
川原 重幸 業務推進部長
宮部 尚純 温帯性まぐろ資源部長
本多 仁 熱帯性まぐろ資源部長
宮下 富夫 外洋資源部長
井浦 信弘 業務管理課長
中野 秀樹 業務推進課長 (事務局)

3 議事の概要

議 題	報 告 ・ 議 論 の 概 要
所長挨拶	運営委員会開催の経緯、目的を説明した。
座長指名	運営要領に基づき業務推進部長が座長に指名され、議事が開始された。
(1)水研センターを巡る動きとH20年度運営状況 所長 資料:1 ・ H20年度運営状況	・ 報告内容：中長期的研究開発体制の検討状況について説明。研究開発力強化法に基づく任期付任用研究者の採用、テニユア制導入について。各研究部単位の小課題評価を廃止し、中課題単位での評価会議を実施する。全国水産技術者協会の発足。外洋資源部「南大洋生物資源研究室」を「外洋生態系研究室」へ改組。中期計画3年目であり、各課題の進捗状況を再点検、目標達成を確実なものにした。論文公表を促すための研究奨励賞の設置。クロマグロについて県水試などとの連携を強化し情

<p>(2) 中長期研究開発方針</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 遠洋水産研究所全体 業務推進部長 資料: 2 ・ まぐろ資源 2 部 熱帯性まぐろ資源部長 資料: 3 ・ 外洋資源部 外洋資源部長 資料: 4 <p>(3) 遠洋漁業関係研究開発 推進特別部会 所長 資料: 9</p> <p>(4) 体制と予算 業務管理課長 資料 : 7, 8</p> <p>(5) 俊鷹丸の運航 業務推進課長 資料: 10</p> <p>(6) 広報活動 業務推進課長 資料: 1 1</p>	<p>報相互交換を推進。広報の強化。まぐろ国際委員会、IWC等の国際的な動きへの対応。WFC2008へ積極的協力および参加。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 報告内容：遠洋漁業の振興、水産物の安定供給を確保するため、遠洋漁業海域に関する研究ニーズを掘り起こし、他研究機関等との協力を行いつつ問題解決に研究努力を傾けるとの全体像を紹介した。 ・ 報告内容：過剰漁獲や小型魚漁獲の問題、太平洋中西部の新たな漁業条約への対応、はえ縄漁業縮小への対応、混獲への対策などについて、関係機関と連携をとって研究、事業を推進している。研究成果である軽量トリラインの実用化、カツオの来遊量予測、クロマグロの年齢査定、クロマグロ仔魚と水温の関係把握について説明した。 ・ 報告内容：研究の対象としている鯨、オキアミ、イカの資源について、調査により科学的知見の蓄積を図り、それぞれの種について他部門と連携した生態系研究への取り組みなどを紹介した。研究成果であるシミュレーションを利用した小型鯨類の管理方式の開発について説明した。 ・ 報告内容：遠洋漁業に関わる行政、業界、地方の研究ニーズの把握と連携強化のために特別部会を開催。本年はまぐろ 2 部と外洋資源部合同の特別部会とした。研究ニーズを把握し、具体的対応を検討して取り組んでいることを説明した。 ・ 報告内容：現在の当所の組織、人員構成を示し説明した。また、年間予算とその内訳を説明した。 ・ 報告内容：平成20年度の俊鷹丸の運航状況および平成21年度の運航計画を報告し、両年の調査日数がほぼ同様であること、他水研の利用が多いことを説明した。 ・ 報告内容：遠洋リサーチ&トピックスを2回発行した。清水港まぐろ祭りに参加。所の一般公開も実施した。本館3Fに常設展示室を新設した。研究所HPを改訂したほか、出前講義を5件行った。 <p>意見交換での主な指摘事項は以下のとおり</p>
--	--

<p>(7) 意見交換</p> <p>組織運営に関すること</p>	<p>[中長期計画について]</p> <p><u>指摘事項等</u>：見直しには多大なレビューが必要でありスムーズに次の中期計画をスタートさせるには十分な時間が必要との指摘があった。</p> <p><u>遠洋水研説明</u>：中期計画は水産庁の中期目標に基づき作成される。計画の構想は、本中期の成果の取りまとめと合わせて21年度から検討されるものと認識。</p> <p>[任期付き任用に関する議論]</p> <p><u>指摘事項等</u>：任期終了時に採用するかしないかが実績を重視するアメリカ型になるのは理解できるが、採用しない場合は、本人にとっても管理側にもかなりの負担であるとの指摘があった。</p> <p>[外洋資源部と清水の関係]</p> <p><u>指摘事項等</u>：組織の一部移転にあたっては、本所と支所のような区別ができてしまい、運営に関してスムーズにいかないような例があるが、いまのところうまくいっているようだとの感想があった。</p> <p>[外洋生態系研究室について]</p> <p><u>指摘事項等</u>：対応すべき国際機関が非常に多いが、行政的な対応に追われて実際の研究はできないのではないかと指摘があった。</p> <p><u>遠洋水研説明</u>：実際の仕事ぶりがどうなるかは未知数であるが、行政的な対応だけでなく生態系を考慮した漁業管理の研究など、研究興味を持続させる運営を行う予定である。</p> <p>[海洋データ解析センターとの関係]</p> <p><u>指摘事項等</u>：遠洋水研の資源研究でも環境との関係を取り上げてはいるが、課題の組み立てをみると、以前よりも海洋環境研究との関係が薄くなっているように感じるとの感想があった。</p> <p><u>遠洋水研説明</u>：水研センターでは先端のモデルを用いて海洋環境の研究を進め、地球温暖化の生態系への影響や新たなモデルの開発にも取り組む予定であることを紹介し、遠洋水産資源研究においては、引き続き海洋データ解析センターと連携して研</p>
<p>調査研究に関すること</p>	<p>[海洋データ解析センターとの関係]</p> <p><u>指摘事項等</u>：遠洋水研の資源研究でも環境との関係を取り上げてはいるが、課題の組み立てをみると、以前よりも海洋環境研究との関係が薄くなっているように感じるとの感想があった。</p> <p><u>遠洋水研説明</u>：水研センターでは先端のモデルを用いて海洋環境の研究を進め、地球温暖化の生態系への影響や新たなモデルの開発にも取り組む予定であることを紹介し、遠洋水産資源研究においては、引き続き海洋データ解析センターと連携して研</p>

<p>広報に関すること</p>	<p>究を進めること、実際に交付金プロ研や委託事業などにおいて連携の成果が現れていることを説明した。</p> <p>[操業データの電子化について] <u>指摘事項等</u>：コンピュータなどが十分に普及しているのだから操業データを電子化して提出してもらい、データ化を早めることはできないかとの指摘があった。</p> <p><u>遠洋水研説明</u>：漁獲成績報告書の提出は水産庁の省令で定められている。早期提出が試みられているが、収集先の水産庁で書類を点検するため、なかなかデータ化する時間の短縮は難しい。</p> <p>[研究成果の公表について] <u>指摘事項等</u>：実際に資源が減少しているなどの事実がある場合、資源保護の観点から努力量の抑制なども含めて提案してほしいとの要望があった。</p> <p>[研究テーマおよび内容について] <u>指摘事項等</u>：歴史的に見て研究テーマが大きく変化しているような気がする。生物関係など基礎面でも十分に実のある研究ができるようになってきているように感じられる。期待しているとの感想があった。</p> <p>[マスコミ向けの情報の流し方] <u>指摘事項等</u>：本日の研究成果の発表等を聞いて、ニュースになる素材はたくさんあると感じた。それらの情報をマスコミ側がどのようにして知り、入手できるのか、また記事にできるかどうかといったことがわからないのが実情である。水産庁でプレスリリースするもので遠洋水研に関するものは地方でも同時にリリースしてほしい。日頃からのマスコミとの関係を保ち、研究情報をマスコミに把握してもらおうという姿勢が必要との指摘があった。</p> <p>[消費者に向けた視点] <u>指摘事項等</u>：例えば、蓄養まぐろは安全か、そのようなことはここに聞けばいいのか。また研究予算をとるためには政治家の理解が必要である。一般にわかりやすい広報を心がけてほしい旨、指摘があった。</p>
-----------------	--

閉会（所長）	<p>[メディアとの付き合い]</p> <p><u>指摘事項等</u>：一般の記者にとって、水産は専門性があり、国際的であり、深い知識を必要とする敷居の高い分野である。メディアも効率化を求められている中で、なかなか入りにくいので、水研側にはメディアと連携し、メディアを育てるような視点、メディアを使うような意識での対応が必要となる。また、ニュースは表面に現れた事象から始まって、要所での専門家のコメントにより、次第に背景にある本質的な問題についての議論に発展していくことがある。遠洋水研にはまぐろや鯨の問題について、研究の立場からニュースの流れを作るような役割を期待したい。また、そのような人材を持ってもらいたい。身近に接触できる地元メディアとの連携を進めることを期待したい。</p> <p>本日の議論を、これからの遠洋水研の活動の糧として対応していきたい旨を述べ閉会とした。</p>
--------	--